

## 來自蕉兵會友的一段話

「蕉兵會」是在戰爭結束那年，由曾被徵召為學徒兵的臺高畢業生們所創辦的聚會，我已經加入滿五年了。

在各式各樣的灣生集會中，蕉兵會的獨特之處，就在於它不僅是聯絡感情的親睦會，更是邀請會員互相分享的研討會。會員們各個富有鮮明個性及魅力，總是為我們這些戰後出生的後進會友們帶來莫大刺激與啟發。

21 文甲班的竹內昭太郎先生，身兼蕉兵會之創辦人與負責人職位，有著超群的記憶力，就連當年入學尋常科時，同班同學的自我介紹都還記得清清楚楚，實在令人驚嘆。他那能將回憶如同影片場景般再現敘述的模樣，或許正是他身為右腦型人的證明。另外，他也廣泛涉略各式領域，具有豐富學識，總能不斷提出令人耳目一

新的見解，並在談話時延伸出無邊無際的精采話題。真不愧是在幼稚園時期，參觀小一姊姊的上課狀況時，就能瞬間回答出二位數加法的答案，受人讚頌為「有史以來難得的秀才」之人物。竹內先生就讀於尋常科的時候，就已開始創作小說及哲學方面的小論文，其早熟的才華直至今日仍盡情發揮，面對模糊的事情，他也會以柏格森式的直覺主義予以犀利評析。

而據說竹內先生在法務省入國管理時代下，似乎也曾幫助了許多台灣人，處理入境日本的相關事務。

至於同樣身為負責人之一的 21 理乙班・川平朝清先生，則是一位知悉琉球王朝歷史的人物。據說在學徒兵時代，他曾痛心於沖繩的戰況，直接去到戰場前線，當面向上級長官提出申訴。每當蕉兵會

## 高橋潤子

出生於北海道，父方家屬是來自庫頁島的遣返者，因接觸「日語世代」的歷史為契機，約十年前開始與臺灣往來，為了替日語世代及灣生發聲而從事相關活動，目前於蕉兵會擔任庶務及會報編輯的工作。

日語世代：在第二次世界大戰結束之前，於日本的海外領土出生、接受教育、現在仍可流暢地使用日語的世代。



中展開激烈議論時，川平先生總是靜靜聆聽，並在最恰當的時機點介入話題打圓場，使氣氛和緩下來。這或許是因為他來自往昔擔任琉球與日本間翻譯的家族，才能如此嫻熟地協調眾人，著實令我欽佩。

儘管蕉兵會友們進入臺高就讀時，已經是戰爭後期，難以體會到「自由自治」的學風，但我們還是能從他們身上感受到自由豁達的氣質。或許是拜他們豐富的閱讀量，以及同學間經常展開的哲學議論所賜，每一位會員都有著獨到見解，且勇於向他人闡述，那能言善辯的英姿，至今依然健在。

舊制高校雖然在戰後解體，但透過臺高畢業生們，可以充分讓人理解到，戰前的菁英教育絕不是失敗的教育方針。菁英教育並非一味地埋頭死讀書，而是囊括各

式才藝教養與人格培養課程，我認為在當今時代下，這樣的模式更是具有參考價值。

而共同存在於被遣返回日本的蕉兵會員們心中的，就是對於故鄉臺灣的思念。我想，在每一位會員身上都能感受到的豐富心靈與開闊胸懷，就是由臺灣的風土孕育而成。每當他們提到故鄉的話題時，總能在他們臉上看見懷念、溫暖、以及滿滿的深刻感情。

除了感謝上天給我與蕉兵會的緣分，我也希望今後能夠持續關注臺北高等學校的歷史，並將其珍重地保存、流傳後世。藉著即將到來的創校一百周年，衷心期待能與更多關心臺北高校的朋友們共同慶祝。（黃寶萱譯）

高橋潤子

## しょうへい会友として



終戦の年に学徒兵として招集された台高OBの集まり「しょうへい会」に参加し五年ほどになります。

台湾出身者の集まりの中でも、しょうへい会は単なる親睦会ではなく勉強会を行うユニークな存在です。当然、会員達もそれぞれ個性が際立ち、人間的魅力に溢れ、戦後生まれの我々会友に、いつも大きな刺激を与えて下さいます。

しょうへい会発起人で世話人の21 文甲・竹内昭太郎さんは、抜群の記憶力の持ち主。何と言っても、尋常科入学時のクラスメートの自己紹介を詳細に覚えておられるのは驚異的です。記憶がビデオ映像のごとく蘇るご様子は、右脳型人間の証かもしれません。また興味関心が多岐にわたり、知識が実に豊富です。他の人が思いつかないような発想が次々と湧き、お話はどこま

でも広がり留まるところを知りません。さすが、幼稚園時代に小学一年生のお姉様の授業参観で、算数二桁足し算を瞬時回答し、「開びやく以来の秀才」との呼び名を贈られた方です。尋常科時代すでに小説や哲学小論を執筆された早熟ぶりは、その後も遺憾なく発揮され、曖昧な事柄もベルクソンの直観でズバリと指摘されます。

法務省入国管理局時代は台湾からの入国者対応にも多くあたり、助けられた台湾の方も随分おられるようです。

同じく世話人の21 理乙・川平朝清さんは、琉球王朝の流れをくむ方。学徒兵時代、沖縄の戦況に胸を痛め、現地突入を上官に直訴したこともおありだとか。しょうへい会では白熱した議論を静かに聞いておられ、絶妙のタイミングで合いの手を入れ、場の空気を和らげて下さい



## 高橋潤子

北海道生まれ。日本語世代の歴史に触れたことをきっかけに、十年ほど前より台湾通いを開始する。以来、日本語世代と湾生の声を伝えるべく活動を行う。しょうへい会では庶務および会報編集を担当。父方は樺太からの引揚者。

ます。この辺はやはり、琉球の通訳などを務めてこられたお血筋がなせる業かと感心させられております。

しょうへい会員の台高入学時は、戦争末期で「自由と自治」の校風は殆ど感じられなかったとのことですが、それでも彼等からは自由闊達な気質が伺えます。膨大な読書と学友との哲学論議の賜物でしょうか。各人が独自の意見を持ち、それを臆することなく述べられ、弁舌の巧みさは未だご健在です。

戦後、旧制高校は姿を消しましたが、台高OBを見ていると、戦前のエリート教育が決して悪いものではなかったことがよく分かります。頭でっかちのガリ勉ではなく、幅広い教養と人格を兼ね備えた人材育成のシステムは、むしろ今こそ必要とも思えます。

引揚者であるしょうへい会員に共通するのは、故郷台湾に対する思いです。皆に共通するおおらかさ、心の豊かさは台湾の風土により育まれたものでしょう。彼等が故郷を語るとき、その表情から懐かしさとあたたかさ、そして深い愛情が見てとれます。

しょうへい会とのご縁に感謝しつつ、これからも台北高等学校に関心を寄せ、その歴史を大切に語り継いでいく所存です。来る創立百周年を、多くの関係者の方々と共に祝うことを心待ちにしております。

高橋潤子